レビ記１６章　　**「すべての罪からきよめられる」**　　２００７．４．２９　赤羽聖書教会主日礼拝

**１．　アロンのふたりの子の死後、すなわち、彼らが主の前に近づいてそのために死んで後、主はモーセに告げられた。**

**２．　主はモーセに仰せられた。**

**「あなたの兄アロンに告げよ。**

**かってな時に垂れ幕の内側の聖所にはいって、箱の上の『贖いのふた』の前に行ってはならない。**
**死ぬことのないためである。**
**わたしが『贖いのふた』の上の雲の中に現われるからである。**

**３．　アロンは次のようにして聖所にはいらなければならない。**
**罪のためのいけにえとして若い雄牛、**
**また全焼のいけにえとして雄羊を携え、**

**４．　聖なる亜麻布の長服を着、亜麻布のももひきをはき、**
**亜麻布の飾り帯を締め、亜麻布のかぶり物をかぶらなければならない。**
**これらが聖なる装束であって、彼はからだに水を浴び、それらを着ける。**

**５．　彼はまた、イスラエル人の会衆から、**
**罪のためのいけにえとして雄やぎ二頭、全焼のいけにえとして雄羊一頭を取らなければならない。**

**６．　アロンは自分のための罪のためのいけにえの雄牛をささげ、自分と自分の家族のために贖いをする。**

**７．　二頭のやぎを取り、それを主の前、会見の天幕の入口の所に立たせる。**

**８．　アロンは二頭のやぎのためにくじを引き、一つのくじは主のため、一つのくじはアザゼルのためとする。**

**９．　アロンは、主のくじに当たったやぎをささげて、それを罪のためのいけにえとする。**

**１０．　アザゼルのためのくじが当たったやぎは、主の前に生きたままで立たせておかなければならない。**
**これは、それによって贖いをするために、アザゼルとして荒野に放つためである。**

**１１．　アロンは自分の罪のためのいけにえの雄牛をささげ、自分と自分の家族のために贖いをする。**
**彼は自分の罪のためのいけにえの雄牛をほふる。**

**１２．　主の前の祭壇から、**
**火皿いっぱいの炭火と、両手いっぱいの粉にしたかおりの高い香とを取り、垂れ幕の内側に持ってはいる。**

**１３．　その香を主の前の火にくべ、香から出る雲があかしの箱の上の『贖いのふた』をおおうようにする。**
**彼が死ぬことのないためである。**

**１４．　彼は雄牛の血を取り、指で『贖いのふた』の東側に振りかけ、**
**また指で七たびその血を『贖いのふた』の前に振りかけなければならない。**

**１５．　アロンは民のための罪のためのいけにえのやぎをほふり、その血を垂れ幕の内側に持ってはいり、**
**あの雄牛の血にしたようにこの血にもして、それを『贖いのふた』の上と『贖いのふた』の前に振りかける。**

**１６．　彼はイスラエル人の汚れと、そのそむき、すなわちそのすべての罪のために、聖所の贖いをする。**
**彼らの汚れの中に彼らとともにある会見の天幕にも、このようにしなければならない。**

**１７．　彼が贖いをするために聖所にはいって、再び出て来るまで、だれも会見の天幕の中にいてはならない。**
**彼は自分と、自分の家族、それにイスラエルの全集会のために贖いをする。**

**１８．　主の前にある祭壇のところに出て行き、その贖いをする。**

彼はその雄牛の血と、そのやぎの血を取り、それを祭壇の回りにある角に塗る。
１９．　その残りの血を、その祭壇の上に指で七たび振りかける。
彼はそれをきよめ、イスラエル人の汚れからそれを聖別する。

２０．　彼は聖所と会見の天幕と祭壇との贖いをし終え、先の生きているやぎをささげる。
２１．　アロンは生きているやぎの頭に両手を置き、
イスラエル人のすべての咎と、すべてのそむきを、
どんな罪であっても、これを全部それの上に告白し、
これらをそのやぎの頭の上に置き、係りの者の手でこれを荒野に放つ。
２２．　そのやぎは、彼らのすべての咎をその上に負って、不毛の地へ行く。
彼はそのやぎを荒野に放つ。

２３．　アロンは会見の天幕に入り、聖所に入ったときに着けていた亜麻布の装束を脱ぎ、それをそこに残しておく。
２４．　彼は聖なる所でそのからだに水を浴び、自分の衣服を着て外に出て、
自分の全焼のいけにえと民の全焼のいけにえとをささげ、自分のため、民のために贖いをする。
２５．　すなわち、罪のためのいけにえの脂肪を祭壇の上で焼いて煙にしなければならない。

２６．　アザゼルのやぎを放った者は、その衣服を洗い、そのからだに水を浴びる。
そうして後に、彼は宿営にはいることができる。
２７．　罪のためのいけにえの雄牛と、罪のためのいけにえのやぎで、
その血が贖いのために聖所に持って行かれたものは、
宿営の外に持ち出し、その皮と肉と汚物を火で焼かなければならない。
２８．　これを焼く者は、その衣服を洗わなければならない。
そのからだに水を浴びる。
こうして後に宿営にはいることができる。

２９．　以下のことはあなたがたに、永遠のおきてとなる。
第七の月の十日には、あなたがたは身を戒めなければならない。
この国に生まれた者も、あなたがたの中の在留異国人も、どんな仕事もしてはならない。
３０．　なぜなら、この日に、あなたがたをきよめるために、あなたがたの贖いがなされるからである。
あなたがたは、主の前でそのすべての罪からきよめられるのである。
３１．　これがあなたがたの全き休みの安息であり、あなたがたは身を戒める。
これは永遠のおきてである。
３２．　油をそそがれ、その父に代わって祭司として仕えるために任命された祭司が、贖いをする。
彼は亜麻布の装束、すなわち聖なる装束を着ける。
３３．　彼は至聖所の贖いをする。
また会見の天幕と祭壇の贖いをしなければならない。
また彼は祭司たちと集会のすべての人々の贖いをしなければならない。
３４．　以上のことは、あなたがたに永遠のおきてとなる。
これは年に一度、イスラエル人のすべての罪から彼らを贖うためである。」
モーセは主が命じられたとおりに行なった。

# 説 教

レビ記 16 章は

いわゆる「大贖罪の日??? ? ???」 に関する規定です。
これは過越の祭りから数えて「第七の月の十日（西暦では毎年 9 月末から 10 月半ば頃）」(16:29)に当たります。
「第七の月の十日には、あなたがたは身を戒めなければならない。
　この国に生まれた者も、あなたがたの中の在留異国人も、どんな仕事もしてはならない。
　...これがあなたがたの全き休みの安息であり、あなたがたは身を戒める。」(16:29-31)
このみことばの通り、今でもイスラエルでは、
この日は断食し、入浴や化粧をせず、新聞は休刊し、
人々はユダヤ教の会堂に集まって低い椅子に座り、罪を悔い改める祈りを繰り返します。
1965 年、この日がメジャーリーグのワールドシリーズ開幕戦に重なった時、
ドジャーズのユダヤ人投手サンディ・コーファックスは先発を拒否しました。
1973 年には、エジプトのサダト大統領が
わざわざこの日を狙ってイスラエルを攻撃したためイスラエルは対アラブ諸国戦争で初の敗北を喫します。
ユダヤ人にとっては実は未だにそれほど大切な日です。

最初に、神さまは、年に一度、ただひとり大祭司に限り、
この日にだけ、至聖所（契約の箱の置いてある、幕屋の一番奥の部屋）に入ることを許します。
そして、もしも「かってな時」に至聖所に入るなら、
アロンの二人の息子ナダブとアビフの様に神さまの怒りを受けて死ぬことになると警告なさいます(16:2)。
大祭司は、この日はいつもの宝石輝く青い大祭司の衣装を脱ぎ、
全身水を浴びて身をきよめ、上下白い亜麻布の祭司服のみを質素に身に着けます。
そして、
罪のためのいけにえの雄牛、
全焼のいけにえの雄羊、
罪のための雄やぎ二頭、
全焼のいけにえの雄羊一頭を取ります(3-5)。

こうして、アロンはまず自分と自分の家族のために「罪のためのいけにえ」として雄牛をささげます。
至聖所の手前にある香の祭壇から取った炭火に両手一杯の粉末の香を乗せて炊いたものと一緒に、
ほふった雄牛の血を至聖所に持って入り、
もうもうと煙が立ち込めて「贖いのふた(契約の箱の純金の蓋のことで、二人の天使が羽を広げて契約の箱を守っている。
神さまがその所に於いてご自身の臨在の栄光をあらわすと言われた)」が見えなくなるようにしながら、
その贖いのふたの前面に雄牛の血を七回振りかけます。
そうして、自分と自分の家族が犯した罪で汚された聖所をきよめます(11-14)。

そうして、いよいよ次に、
イスラエルの民の罪のために汚されてしまった聖所をきよめます。
この際に登場するのは「罪のためのいけにえ」としてのやぎです。
先に行ったと同様に、大祭司は、やぎをほふり、その血を至聖所に持って入り、「贖いのふた」の前面に振りかけます。
そうして、イスラエルの民が犯した罪の故に汚されてしまった聖所、幕屋をきよめます。
「彼はイスラエル人の汚れと、
　そのそむき、すなわちそのすべての罪のために、聖所の贖いをする。
　彼らの汚れの中に彼らとともにある会見の天幕にも、このようにしなければならない。」(16)

さらには、
（幕屋の外にある）いけにえをささげる祭壇をきよめるため、
先の雄牛の血とやぎの血を祭壇の角に塗り、残りの血を祭壇に七回振りかけます(18-19)。
そうして、聖所、会見の天幕、祭壇を汚れからきよめるのでした。
「彼はそれをきよめ、イスラエル人の汚れからそれを聖別する。」(19)

神さまはイスラエルと共におられます。

でも、どのようにして神さまはイスラエルと共におられるのでしょうか。

それは幕屋を通してです。
神さまは、幕屋を通してイスラエルにご自身の栄光をあらわし、彼らの祈りを聞いてくださいます。
その意味で幕屋は言わば天国の出張所です。
幕屋は(特に至聖所は)天国に行くことのできなくなった罪深い人間にとっての地上の天国そのものとも言えます。
神さまがそこにおられる、
神さまとお会いできる、
神さまのみことばを聞くことができる、
神さまに語りかけることのできる天国です。
幕屋は聖なる所、神さまに属する神さまのものです。

でも、それなのに、人が罪を犯してしまったらどうなるでしょうか。
幕屋は汚されてしまいます。
神さまの宿る所ではなくなります。
聖なる所ではなくなるのです。
神さまのみことばを聞くことができなくなります。
祈っても神さまは聞いてくださいません。
交わりが絶たれるのです。
それで、そのままでは、人は死に至ります。
だからこそ、身代わりのいけにえの血によって罪を贖う必要がありました。
そして、いけにえの血が振りかけられることによって聖所も幕屋も祭壇もきよさを回復し、
神さまは再び人に対してご自身の栄光をあらわしてくださるようになり、神さまとの交わりも回復したのです。

聖所と幕屋と祭壇がすべてきよさを回復する儀式を終えた後、
祭司は、もう一頭の生きている方のやぎを取り、その頭の上に両手を置いて、
イスラエル人のすべての咎と、すべてのそむきの罪をすべて告白して、荒野に向けて解き放ちます。

頭の上に両手を置く按手行為は、そのやぎが大祭司自身の代理あるいは代償であることを意味します。

つまり、こういうことになります。
もう一頭のやぎの方は主の前に殺されて血を流しましたが、
その殺されたやぎの血のおかげで聖所も幕屋も祭壇もきよさを回復しました。
そして、幕屋は再び神さまの宿る所となり、神と人との交わりは回復して、人はいのちを回復します。

**殺されることを免れて**
**荒野に向けて自由に解放されていくアザゼルの羊のように、**
**言わば死からよみがえった復活体として、世界に向かって、自由に、ひた走りに駆けて行くのです。**

**これが、身代わりのいけにえによっていのちを回復した人間の姿です。**
**この羊は、罪を告白した大祭司の代理であり、代償であり、身代わりであり、大祭司自身です。**
**そして、大祭司とは、イスラエル全国民の代理でありました。**
**ですから、大祭司がやぎを身代わりにしたということは、**
**イスラエル全国民がやぎを身代わりにしたということです。**
**つまり、いけにえとして殺されたヤギもイスラエル全国民の身代わりとして殺されたけれども、**
**殺されることを免れて、無罪放免で、荒野を駆けて行くヤギ自身もイスラエル全国民を代表していたのです。**
**つまり、**
**イスラエルは、**
**罪深いままでありながら、**
**向かい行く世界も全く不毛の荒野でありながら、**
**しかし、いずれにせよ、**
**神のさばきを免れて、いけにえの血の力によって殺されることを免れて、**
**自由に、思いっ切り、この世という荒野を、力強く、ひた走り生きていく者とされたのでした。**

**こうして、**
**きよさを回復した幕屋に於いて、**
**大祭司は再び輝く大祭司の衣装を着て、**
**自分と民のために**
**「罪のためのいけにえ」と**
**「全焼のいけにえ」とをささげて、**
**今度は自分たちの罪を贖って、また一年間神と共に生き始めるのでした。**

**このすばらしい恵まれた事実を心深く思い出して感謝するために、**
**「大贖罪の日」には、断食をし、全ての仕事を休んで、この「大贖罪」の儀式に参加しなければならないと教えます。**

**２９．　以下のことはあなたがたに、永遠のおきてとなる。**
**第七の月の十日には、あなたがたは身を戒めなければならない。**
**この国に生まれた者も、あなたがたの中の在留異国人も、どんな仕事もしてはならない。**
**３０．　なぜなら、この日に、あなたがたをきよめるために、あなたがたの贖いがなされるからである。**
**あなたがたは、主の前でそのすべての罪からきよめられるのである。**
**３１．　これがあなたがたの全き休みの安息であり、あなたがたは身を戒める。**
**これは永遠のおきてである。**

**３２．　油をそそがれ、その父に代わって祭司として仕えるために任命された祭司が、贖いをする。**
**彼は亜麻布の装束、すなわち聖なる装束を着ける。**
**３３．　彼は至聖所の贖いをする。**
**また会見の天幕と祭壇の贖いをしなければならない。**
**また彼は祭司たちと集会のすべての人々の贖いをしなければならない。**
**３４．　以上のことは、あなたがたに永遠のおきてとなる。**
**これは年に一度、イスラエル人のすべての罪から彼らを贖うためである。」**

**モーセは主が命じられたとおりに行なった。**

「**年に一度、イスラエル人のすべての罪から彼らを贖う**」と言われます。

いけにえと、
大祭司と、
幕屋、
これら「聖なる器」を通して、私たちは罪を贖われます。
神さまはご自身を顕されます。

今日の私たちはどうでしょうか？

実は、私たちはこれ以上の恵みに生かされています。
すなわち、私たちは、イエスキリストにあって、これらすべての恵みにあずかっているのです。

イエスキリストは、まことの大祭司でした。
「メルキゼデクの位に等しい大祭司」です。
「人々に代わる者として、任命を受けた、罪のために、ささげ物といけにえとをささげる」大祭司です。
人々の罪を贖う大祭司です。

しかも、まことのいけにえです。
「やぎと子牛との血によってではなく、
　ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」

そして、「まことの聖所」です。
イエスさまが十字架で死なれた時、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けました。
「イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。」

キリストにあって、私たちは至聖所の中にあります。
究極の祝福の中にいるのです。

追放された、

誰も入れなかった、入ろうとすると打たれて殺される、年に一度大祭司しか入れなかった、至聖所です。
そこに神さまがおられます。

まことの大祭司、幕屋、そして、いけにえなるイエスキリストにより、
私たちは、大胆に至聖所の中に入り、神さまを礼拝し、神さまと自由に交わりができるのです。

神と共に生きることができます。

救いとはこういうことです。
それは神との交わりです。
インマヌエル　神は我らと共におられる
世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる

だから、大いに、
いよいよ感謝しましょう。
罪を悔い改めましょう。
みことばを聞きましょう。
祈りをささげましょう。

神さまは私たちを愛してくださいます。
私たちと共にいてくださいます。
喜びと感謝をもって、神と共に生きていきたいと願います。